

宿題

家族の練習問題(3) - 父よ母よ - 団 士郎 ホンブロック刊より

人間コミュニケーション論と題した授業をしている。



若者のコミュニケーション力批判がかねてから鼻についていた。

そこで、徹底した実習授業をと、毎週、毎週、対話の実技をさせている。百人規模の教室では、異色の授業になっている。



とにかく様々な切り口から、受講生のコミュニケーションに関する思い込みにお節介し続けている。



その一つに、自分の関係世界における、具体的な悩みを探して報告し、相手に助言を求めるというエクササイズがある。



その日に教室でペアになった未知の人に、自分の上手くいっていないコミュニケーションの悩みを手短かに話す。



バイト先の上司ととか、サークルの下級生、両親、友人、彼女、彼氏等、いろんな関係のちょっとした悩みが話される。

聞かされた方は、それに何か一つ必ず具体的な提案をする。



助言された側は、出来るだけそれを次回までに実行してみる。



このポイントは、アドバイスする側が相手のことをあまり知らない事である。

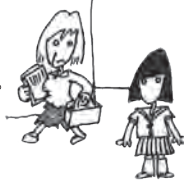
人は事情を知れば知るほど、他人の事について軽々しく語れなくなる。



ある時、一組の男女ペアで、女子学生が語ったのは、こんな事だったようだ。



自分は母親となぜか上手くいかない。



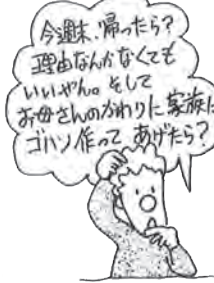
共働きで頑張り屋の母と、いつの頃からかぎくしゃくしたままである。

下宿暮らしになる大学を選んだのも、心の底にはそれがあつた。



妹は母と似た頑張りっ子で、地元大学の一年生。私は帰省も滞りがちで...

聞かされた男子学生は、



突然そんなこと出来るはずがないと彼女は思った。



でもそこで、講師がいつもいう「固めてしまった説明に自分を閉じ込めるな。自分のために自由だということを忘れるな」を思い出した。

土曜の午後、彼女は連絡もせずに帰省した。



家族は驚いたが、特にいつもと変りなく、あつという間に時間は過ぎた。



月曜の朝には又、大学に戻らなければならぬ。家族もそれぞれ出勤、登校する。



日曜の晩、彼女は決心して家族の弁当を作ることにした。



翌朝、自分の分も含めて四つの弁当を整えて、それぞれに「はい！」と手渡した。



と母親は冷やかした。

バタバタとあつてなくみんなが出てゆき、彼女は最後に戸締りをして家を出た。

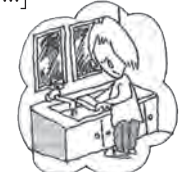


あんな事ぐらいで、何かが変わるとは思っていなかったが、やはり少しは期待があつたのか、ちょっと気持ち沈んでいた。



夕刻の授業に出て、下宿に戻った夜遅く、妹から電話があつた。

「お母さん、お弁当箱洗いながら、泣いてた…」



涙が出た。

母に、そしてそのことを伝えてきてくれた妹に、とても素直になれる気がした。



採点されるわけでもない宿題がまた一つ、大きな仕事をしてくれたと思ってレポートを読んだ。

子ども・若者の居場所づくりフォーラム

@ 横浜市開港記念会館 2017.1.25

program

第一部 講演

「現代社会における、子ども・若者にとっての居場所の価値」

講師 特定非営利活動法人 さいたまユースサポートネット 青砥 恭さん

第二部 交流・情報交換会

「ワールドカフェで出会おう！語り合おう！」

ファシリテーター 特定非営利活動法人 よこはま地域福祉研究センター センター長 佐塚 玲子

テーマ1 子ども・若者の暮らしの変化で気づいていることはどんなこと？

テーマ2 地域で行いたい取り組みはどんなこと？

テーマ3 取り組んでいる活動・これから取り組もうとする活動の課題って何？

横浜市開港記念会館

横浜開港 50 周年を記念し、市民の寄付金により大正 6 年 7 月 1 日に開館。開館以来、横浜の代表的建造物の一つとして多くの市民に親しまれている。昭和 34 年からは、「横浜市開港記念会館」の名称で、中区の公会堂になり、平成元年には国の重要文化財に指定された。平成 29 年、横浜市開港記念会館は、開館 100 周年を迎える。

叫ぶ息子に
繰り返し母親を責め、
だから復讐してやるのだと





特定非営利活動法人 さいたまユースサポートネット

現代社会における、 子ども・若者にとっての 居場所の価値

ユースの居場所「たまり場」&「若者自立支援ルーム」

さいたまユースサポートネットでは、「たまり場」と「若者自立支援ルーム」を運営しています。2011年に始めた居場所のない子ども・若者が、自由・安心・安全に過ごせる場「たまり場」の取り組みを通し、さいたま市の委託事業として、子ども・若者の自立を支援する「若者自立支援ルーム」（以下、ルーム）を始めました。

ルームでは、毎日、中学生から30代の子ども・若者が過ごしていて、年間延べ利用人数は約7,000人。不登校や障害のある子ども、高校中退者や施設入所者など、子どもたちの背景はさまざまですが、安心して居ることのできる場がない、孤立した貧困層の家庭の子どもが圧倒的に多いのが現状です。

居場所のない子ども・若者たち

両親は
堪らないほど不安だったが、
安易に意見はせず
黙ってひたすら聞いた。



右頁の図は、居場所のない子ども・若者の事例です。

居場所がない、また、孤立した状態にある要因が、複雑多様であることがわかるでしょうか。このような課題を抱える潜在的な家庭が増えていることも予想されます。更に問題は、こういった家庭の子どもが、自ら家庭の外に支援を求めることは非常に難しいこと。また、問題が地域社会で顕在化しても、問題が複雑多様であるため、例えば行政のどの部署が対応するのか等、迅速な対応が困難な場合が多いのです。

子どもは、生きる力、自立した大人になるための力をつけるために学校で学びます。しかし、事例の子どもたちは一様に学校に行けず、力をつけることが難しい状況にあります。

また、不登校、低学力、いじめや非行など、子ども自身の問題にも学校のみで対応するには限界があり、行政や民生委員児童委員、民間の支援機関などによる支援が必要になっています。

また、生活困窮とは経済的な問題だけではないということや世代間で連鎖する傾向があることも分かってきました。

代表理事

青砥 恭さん

YASUSHI aoto

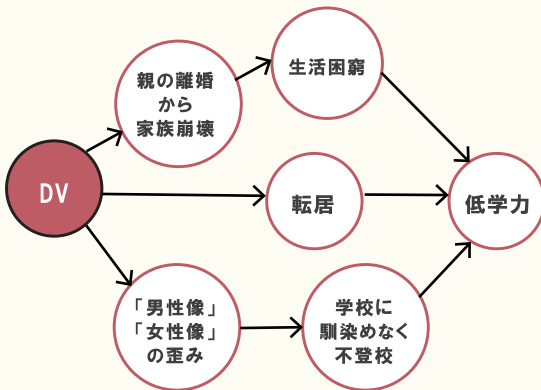
PROFILE

NPO 法人さいたまユースサポートネット代表理事。1948年生まれ。元埼玉県立高校教諭、現在、明治大学・埼玉大学講師。子ども・若者と貧困、自立支援問題を研究する。2011年、さいたまユースサポートネットを設立し、さいたま市において居場所のない若者の支援活動をおこなっている。著書に『ドキュメント 高校中退—いま、貧困がうまれる場所』（ちくま新書）など

日常的な生活の問題、教育の問題、就労の問題など、複雑な世帯の問題を解決するには、専門家が加わったネットワークによって、様々な支援方法を検討することが必要です。

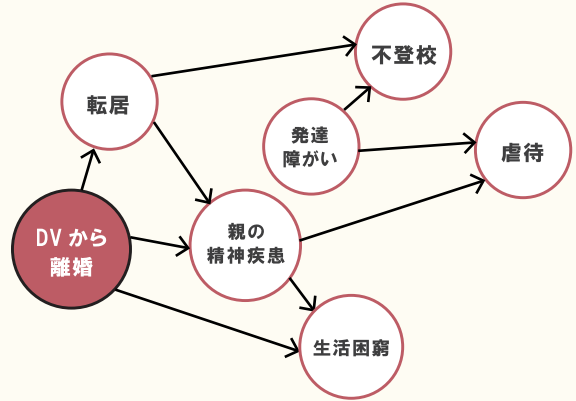
① Aさんのケース>DV→家族の崩壊→困窮

DVから離婚。家族が崩壊し転居。貧困が一層深刻に。勉強する余裕はなく、学校になじめず不登校になり、低学力。DVがある環境で子どもは男性像・女性像にゆがみを持つ。父親が非正規雇用で低賃金の問題がある。



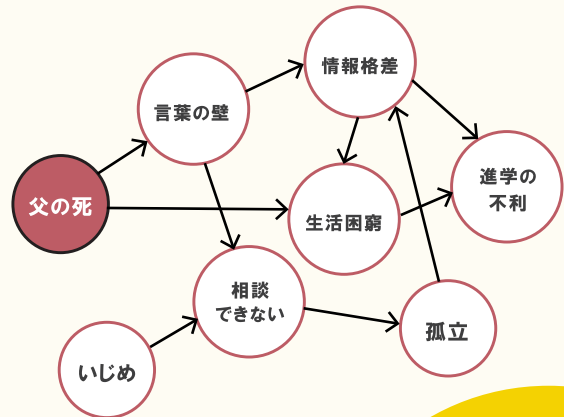
② Bさんのケース>発達障害・親の精神疾患→虐待

DVから離婚。母親は精神疾患により働けず生活保護を受給。生活困窮が始まる。転居し学校になじめずに不登校に。子どもには発達障害がある。母親は精神疾患により子どもの世話ができず、育児放棄の状態となる。



③ Cさんのケース>父の死→困窮→孤立

父が死亡。母親は外国の人で日本語の理解が困難。法律の理解が難しく、外国籍のため日本の制度が使えない。深刻な情報格差で、一層貧困化する。子どもが学校でいじめられても学校の先生たちにも相談できず、孤立。



部屋に籠ったままの兄の気配をうかがいながら、弟は流行のゲームソフトを差し入れたりした。



子どもは学校で学ぶことで孤立や貧困から脱却するための力をつけていくのですが、事例の子どもたちは学校に行くことができず、力をつけることが難しい状況にあります。

ある家族は、子どもが18歳で2人の子どもの母親です。三世代続けてシングルマザーで、生活保護を受給しています。高校は卒業しておらず、若年出産という自立において一番困難なケースですが、それが代々続いており、安定的な就労が得られていません。ひとつの世帯に問題は複雑に複数存在しています。だからいろいろな支援の方法を考え、専門家が加わったネットワークをつくっておく必要があります。

居場所のない子どもたちはどう作られるか・川崎の事件とは何か

問題のある子どもに対し、時として教員は「学習意欲がない。努力しない」と言いますが、生まれてから親や周りから「バカ、消えろ、死ぬ」と言葉を掛けられてきた子どもに、他人と交流を深める力や、自分自身への自己肯定感や自尊心が育つわけがありません。また、そういう子どもはいじめの対象にされやすく、非行、不登校や高校中退、進路未決定のまま卒業していきます。

川崎と埼玉の東松山で発生した、子どもが子どもを殺害する事件の被害者・加害者もそういう状況にあった子どもたちです。彼らは学校に居場所も仲間もできなかったの、外にコミュニティを作りました。川崎は小さなグループで、東松山は暴走族でした。入ったコミュニティは暴力的でつ



らく、そこから出ようとしたらルールを侵したと制裁を加えられ、死に至りました。どちらの事件も加害者になるか被害者になるかは紙一重で、その時の状況、力関係で決まります。

排除される子どもには、親にも本人にもたくさん課題があり、自己評価が低く、居場所、頼る人がいません。いじめ、不登校や高校中退や進路未決定のまま卒業することが、どれほど子どもたちの困窮のリスクとなるのかを、我々は承知していなければなりません。

学校は子どもたちにとって、学びと社会性を獲得する最大の社会資源です。しかし残念ながら、見守り機能の薄い、大勢で共に過ごす場では、いじめや非行が発生しやすくなっています。居場所、集団に入れないほど排除される人間も出てきやすくなります。それをいかに発見して、子どもたちが安心して暮らせる場にするのが、大人、教師、地域社会の知恵です。

学校で対応できなければ学齢期の子どもたち、不登校や中退者を救う術がありません。長期欠席を含めた約20万人の学校に行けない子どもたちがいて、平成に入ってから300万人が高校を中退し、進路未分の子どもたちがいます。そうした極めて不安定な若者たちを支えていく仕組みが今の日本の社会にはありません。

けっして
力のある人たちではなかったが、
このまま中卒で
恨みだけが残るのでは、
息子の人生が終わってしまうと
両親は思った。



なぜ、若者を支援しなければならないか

高度経済成長期の頃は中学卒業後に働く場がありました。今の日本で中卒や中退者の子どもを雇用する現場を探すのは困難です。そのため若者たちが社会とつながらないまま社会に放置されてしまう状況が出現しています。18世紀の政治思想家エドモンド・バークは「教育は国民の安価な防備である」と言っています。教育とは勉強するだけではなく、社会と子どもたちをつなぐものという認識が必要です。これを移行支援といいます。高度経済成長の頃は中学校も移行支援の要素を持っていました。しかし卒業後98%の子どもが高校に進学する今、中学校にそういう機能はありません。

僕が高校の教員になった1983年、初めて赴任した学校は職業高校でした。そこでも中途退学する子どもはいましたが、退学後も彼らは工事現場やガソリンスタンドなどで働いていました。彼らはもう40代になっていますが、今も生活できています。バブル崩壊後、低成長の時代が続き、日本から製造業が衰退していきました。中卒・中退者が以前のように現場で育てられ、中堅の技術者として成長する時代が戻ることは期待できません。そうした子どもたちをどう支えればよいか大きな課題です。

僕の研究で、地域の企業と農業・工業高校とがどのような連携で子どもたちを育てていくかという調査をしています。長井市の長井工業高校では、地域の中小企業から先生が派遣され、そこで生徒が学び、卒業後そこに就職します。街を離れて戻ってきた子どももそこで働くことができます。そういう場を日本全国につくる取り組みを進めています。

地域の学校が地域の企業を支える。地域の企業が地域の子どもたちや地域の学校を支える。卒業後も地域社会の中で子どもたちは生きていくわけ



そこで二人は
専門学校や私立高校の
パンフレットを取り寄せ始めた。





ですから、仲間が近くにいる、親もいて、働く場所もある。地域活動などしながら、地域の人たちと生きていける関係性をつくっていく。学校から社会につながるというのは、日本社会ではなく、地域の社会につながるというふうに変えていったほうが良いのではないかと考えています。

さいたまユースの居場所・地域づくり

ユースサポートのさまざまな活動は、利用している子どもたちの要求が基になっています。子どもたちは自分には何ができるのか、何が得意なのかをここで発見します。絵や漫画を描く場を用意する。地域との交流、お祭りにも参加します。交流スペースがあり、畑で活動もします。

貧困問題というのは、彼らが何に困っているのか、自分たちで生きていくために何が足りないのか。人間が生まれてから年を取っていくまでの個人を動的に、しかも社会との関係性の中でとらえ、どういう風に社会とかかわりあい、つながりながら生きていけるのかということです。

若者たちはなぜ、居場所を求めるのか

子どもたちにとってどういう居場所が必要なのかを9点にまとめました。

学校という帰属できる「場」を喪失した若者たち

- ① 同じ体験ができる場 → 生きる場を共有する
- ② 生活リズムが確立する → 毎日通って立て直す
- ③ 人との関係性を育てる → 喧嘩・衝突もある
= 慣れる、耐える、客観的にみる力
- ④ 多様な年代の人と話せる
→ コミュニケーションの面白さ、話せる喜び
- ⑤ 悩み事を相談できる
→ 孤立からの解放（第三者に話して整理できる）
- ⑥ 人は多様な存在 → それを見つける面白さ
(人間観察を通して社会認識を育てる)
- ⑦ 働いている人、働いていない人の存在
→ 人はさまざま、そう思うと孤立感がない
- ⑧ 自分を再認識できる → アイデンティティの確認
- ⑨ 自分の居場所 → 安全で安心感、ふらっと立ち寄れる

居場所とは、理論的に言うと、受け止めてくれる場所、他者から認められる場所。異質な人たちと人間の多様性を確認できる、関係性づくりもできる。失敗してもよい場所。そういう居場所が必要なのではないでしょうか。

いろんな子どもたちがここにやってきて、元気を回復する、人とのつながりがうまくなる。若い子どもたちにとっての居場所とは、失敗してもよい、やり直しがきく場、許される場なのだと思います。



彼に無理に見せようとしたわけではなく、あちこちに出かけて学校案内や願書を集めてきた。